

とも @ 歩む

9

滝脇 憲

川崎市で先月、簡易宿泊所が全焼し、10人が亡くなった。宿泊者の多くは高齢者で、生活保護を受けていた。高度成長期、労働者向けに作られた簡易宿泊所は、今や行き場のない高齢

者や生活保護受給者の住まいとなつている。私たちがふるさとの会」が活動する東京・山谷地域でも同様だ。しかし、簡易宿泊所は、長

人を何人も見てきた。建物や居室がきれいで専門的なケアが受けられるからといって、移り住むとは限らない。人とのつながりや地域

症で、一度、遠方の介護施設を紹介された。しかし、入居は見送った。ここでは、彼が長年、日雇い労働で生きてきたことを、近所の人やお巡りさん、支援者も知

障することも大切だ。しかし、どこか「しかるべき所」へ移動させて解決させる発想には限界がある。アパルトであれ簡易宿泊所であれ、安全性を高める努力をして、本人の思いを尊重し、

「今いる場所で」という発想

年そこに暮らしてきた人にとって、必ずしも脱出すべき場所ではない。老人ホームの入居の順番がきても、「ここにいたい」と断った

で過ごした記憶が、体に刻み込まれているからだ。私たちが借り上げている元簡易宿泊所で暮らす80歳のWさんは、重度の認知

が、目的を持って歩いていくように見える。彼にとつて、山谷は紛れもなく「住み慣れた地域」なのだ。安心・安全の確保は最優先だし、多様な選択肢を保

43歳。NPO法人「自立支援センター」ふるさとの会」理事。

* 6人によるリレーコラムです。